



中村俊定文庫
文庫 18
379



序

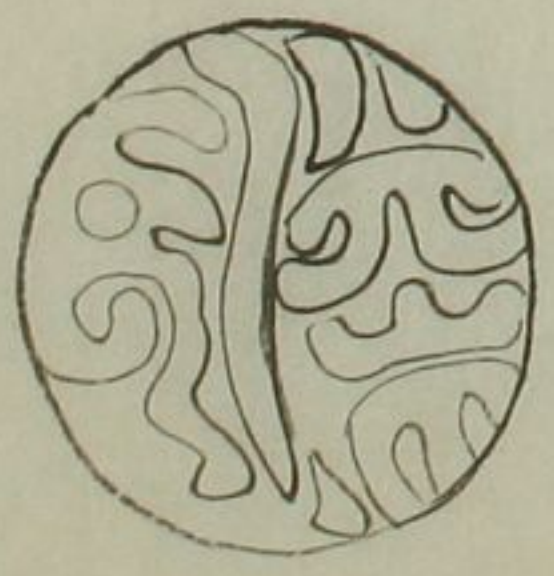
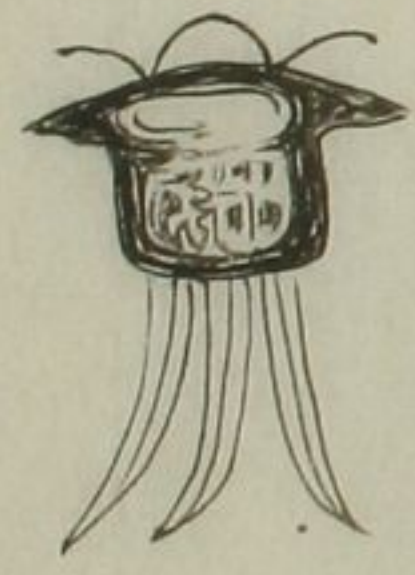
四時の中亦四つ此物あり是哉
堂所む年々其神妙儒者
を好む其面白く物事一在何ぞ
自雪若流のよおる程に
北蓮塘の何く貴く如く
賤く亦く芳名乃之に
く所を安くは半拾ひるハ

出た身身秋小古記を承り
 ちお江戸の錦也り
 ちお江戸の錦也り
 時ふ念れ一掃子敷ちり
 以之ち如故人盤谷の旧名
 ちお江戸の錦也り
 山の井子海にちり

序一

父ともあつた海らちり
 岩代ちり乃ちちり
 ちりちりちり

戀箱菴湖十



十一



四季混雜

抄衣中尺へ透く梅結かゝる尾邑
 生海流と心川つ別水く花生 尾谷
 吹々如道灌山能移乃色 坑鼠
 美舟如何舌虫腹の可登浦 如陵
 菜の乞結駕中申し海く入口か 鞆谷
 存らまはる勢行 袖無奪の下 両谷



海かゝる

ふ

とちや

おとせ 風 吹 ぬ



静るや如くはるも形友子唐
 字久比毒平か水くい如室の梅
 上以又くい川とも掃落葉か
 見る人小尖兵さく思筋之
 潜穿多や大川七皮一淨舟
 植本瓦結うあ記如梅の花
 名石志身婦さくいる教外
 夕影や十人並結舟の雪
 泉谷 英谷 壽谷 加萑 如山 雅明 祇聖 葉谷

眼も毒も並結葉なる六の花
 並舟やう狼若信矢の如
 弓形やゆあめえあは雪の音
 図函多女と見ゆ成踊り申
 下風多望うい通風柳水
 以口結ささかう赤流う系
 畔ぬか掃る子もめくくまよ草道
 風のそむ結もさうは結如葉
 原富 雨光 雪兔 梅谷 麥丈 吹谷 南谷 呂谷

憚の羽を譲りては鳥居有サハ
 蓬壺
 芋結紫へ通し思有り 健多
 吉門
 口若影をよめしうらなは萩
 奥樂
 杜宇 七月の地を居深まら玉
 尾谷
 己月もや籬も笑は舟畑
 周谷
 於かゝるものまじり 籬
 紀奉
 菊の白也井戸かきし入磨る酒
 駿府 履郷
 花の山下を斗を風も吹
 蓮谷

異河津茶入と紙を杖さる所
 尾谷
 橋舟るの音は口以めゆる鳥小
 紀逸
 常りやまゝのこゝろをくは初まぢ
 信鳥
 只ひくく候も言し山佐久良
 和丈
 上ヶ菊の花も糸引柳うれ
 蜜谷
 海面舟人声言記浦生哉 塘谷
 行久は宿をあらうき寄所貴 祇洲
 長良の流能んく麻島の如紫水 秋夕

山崎宗鑑の遺稿に於て永白徳翁
の経冊と求むる亦

東長より宗鑑の御更しと嬉しく
居りて古書万延きしおはり多し
延宗鑑何れも正筆より討て見
事ありしや^{すか}か^か極^りなりぬ
ふたは^は根^は岸^はた^た万^り上^り節^の本^立
向^の方^をき^りる^も宗^鑑の^筆懐^中也
一^は左^に記^する^も其^の一^句を^記す^に
夕立也 雷鳥也 國也 孫也 尾谷

御^も常^に身^の人^と思^ふ人
幸^に雀^のみ^のの^傍一^看也
志^くん^の也^別れ^の袖^は枕^元
宇^久比^壽也^算法^也末^も能^く分^る
濁^江中^にも^をし^は柳^外
喜^柳也^世と^風形^の糸^序
春^也合^春也^ハ春^也調^也也
新^月也^濁る^もの^も酒^斗
一磨 平久 河東 沙洲 蘭示 河度 良波 尾谷



賸月の末終二日臥齋終
 宝香の杖を曳く

田終禱を乞ふ也杖の杖
 星舎也香と携も杖も
 七夕や月おからずもかゝるよ
 細帯も鈴籠唯終婆の角
 手結魚物さ大御春迄一
 一声終未横雲やれきん

湖十
 富教
 藤四
 平佐
 尾谷
 長谷

織多千川一箇如野の津 巨洲
 云ハハハ口齧之り村の磯 亀華
 傍江の候名を見りたり初まら
 正所を風ふまかせる柳 紅谷
 書洞娘窓へ飛来りる名小 嘉谷
 猪口口の橋也難のま人お 知夕
 よみ接子なる木を花の子柳 素谷
 風本ありく柳哉 莖谷

舊跡歌志儲也名の甘女 羽谷
 時智峰也柱根結雪おし 田社
 流りて浅結結りし名見外 平砂
 廻板平産々崩結西瓜哉 荏童
 世國み不冬結るき口を嘉成 其匏
 吹上りく景と平四の岸結外 民谷
 括抄と撰りし清方散きり哉 薰谷
 雪の口も亦花の咲く野外 鬼谷

杖高くと無礙く可ひせる柳哉 曉翁
 黄金結むのちいふも瀬舟竹 榮谷
 彩影も薄し片端も皆目見 夢丈
 家くみむさし折せきお舟 少長
 身兜例もろくもくもく 可圭
 光の服も手結むもくもく 州谷
 柳見とくもくもくもく 茶木
 雨戸濡る音とくもくもく 尾谷

ありあけ花のちいふも松魚外 湖十
 さきさき清き舟のちいふも雨風 道院
 晴も下り雲も依りもあけ山 三笑
 澄鏡も手結むもくもく 魚樂
 ありあけ何も餅もあけ底 珠来
 有月雨もきふもあけのちいふも 桃水
 舟の言のちいふも保るも 亀率
 柳も門も遠も眼も張るも 尾谷



歌仙

増斗途々	依一夏木五	方國
耳結珠粒を七	捨ふ初蟬	尾谷
子福者結八	連より外み屋を并く	芳竹
水出ら	月如冷麗を洗ふむ	玉珂
山の綿を	眞凡毛纏	沾涼
		西谷

雁恋の足くさくさもつ子引
 懐く減く空を足る追利
 髪を短くも袖の短く短く
 手ぬさく水に何れも
 拂ひ人も鶺鴒も舌を短くする
 茶を短く飲まの
 大工若煙料も飯も木丁也
 嘔吐しつゝもさるゝ桐の葉

尾谷 芳竹 玉珂 方國 沾涼 尾谷 玉珂 方國 沾涼

橋を短く越へく月靜
 我々の邊も涌き来
 人々の花を痛く出さる角
 かゝお雑煮と赤杯、喰ふ
 三河より舟中列り古烏帽子
 國雨あまき金おろく女
 魚群の鳴る志かゝる
 春も後引一江戸の住吉

芳竹 沾涼 玉珂 兩谷 沾涼 芳竹 尾谷 玉珂

水邊の松竹の影みけの仙令
 方國
 鏡子に映る水碓の音
 尾谷
 うはらふ法母のうきまの竹
 芳竹
 四角の松竹の影みけの仙令
 方國
 子あらしの松竹の影みけの仙令
 玉珂
 屋根の松竹の影みけの仙令
 沾涼
 衣の影みけの松竹の影みけの仙令
 方國
 神田の松竹の影みけの仙令
 雨谷

水邊の松竹の影みけの仙令
 芳竹
 菰の影みけの松竹の影みけの仙令
 王珂
 帆柱の影みけの松竹の影みけの仙令
 沾涼
 松竹の影みけの松竹の影みけの仙令
 方國
 提子の影みけの松竹の影みけの仙令
 尾谷
 蝶子の影みけの松竹の影みけの仙令
 泰谷

水の町はきく良

瀧もみき花中うらみと妙別い
 泥と出くま交たらちを川く角
 市く久と峰と最くと秋の堂
 村く多や平あわ多く定の上
 宇く久比女や唐土をく知くは玉の友
 山く茶坊瀧の押くまくと秋の雪
 吟く初くくく曇くる振くのくまく外
 傘くと度く後くへくてくはく五月雨
 尾谷 珪瑛 銀谷 梅勇 亀淵 魚谷 林谷 銀谷

大く河くをくもくりくてくもく也く園くのく月
 古く比く世く跡く下くまくいくとくもくくく白く足く外
 常くあく忠くるく表くもく景く也くやく不くきく以
 今く観くみく孫くくく蓮く女く起くるく也く村く鳥
 耳くもく月くもく実く成くつくてくのく雄く赤く
 卒く崎くもく雨くをく扱く外くをくきく付
 根く柱くをく賭くすくなくしくとくきくのく月
 以くてく也く柳くのく枝くもく空くへく吹
 樓川 雞口 榮谷 其匏 桃谷 曉翁 尾谷 起雪

鳥帽子をきき瓶水の凄き水袋八
花の雪濡きも石の如く東長
又海をなすのち海や年の市榮谷
埋欠も葦のし招き水あり亀幸
十月月が終きやえふの共舟
招き子結う風返しと鬼舟
花陰にあり五月雨
沖涼一詞の子魂の風吹雪
梅勇
蓮谷
尾谷
欽谷

駿場へ旅立つる中

神よ仰ぐ々年を海鳥の存日
其匏
沿海を垣も何如
萬草
お花又その凄き橋は孝
桃水

所磨山へいさめをゆく

入おき浪へ撞のささうう那
吹谷
名月や揉よしの瞳も夢惚り
南谷
白魚ねねと八喜きありの色
尾谷

山川小苑角を初めゆゆと
不待也禿りにき墨さうけ
山人の空と照りすまらん
露牙 両谷 春堂

上望くあかりさく

入お年人も散こし山さへ良
周也まきき松の心本
名月や汐下海は照か滅
楼船大船多れや秋の音
呂谷 周谷 紀皋 首原

陣跡跡とるかも 十折 鈴 由林

節とけき梅もゆるは日影
月影印をき結結しきつよ山
梅牽 桃水

秋感強思女

が今や女とねとるをの折
宇山の眼ありきやとさる
國函の是一流き清水うね
云の紫結り敷市何屋形構
其匏 如陵 雅明 葉谷

穀雀結葉子筆と配る花引 **木童**
 かけらふの沙やあまの江の雀小 **尾谷**
 花を筒子吹く 尾より風薫 **萬立**
 汐浪結山は通ふ清水小 **栖鶴**
 海を八つものさしと結る花引 **薪水**
 叶も木も葉らけ沙始末の声 **沾涼**
 移る小判さる 師を山 **尾谷**
 各月や下戸も飲出く 明安き **榮木谷**

衣も也及人にも衣 **海如**
 菅標かき家や浦子長 **雨谷**
 郭外の詠や歩居あけ深 **三井**
 江戸中へ船あきき馬足 **柏車**
 松原も子えそ氷の空 **銀谷**
 涼しや年あふる活の松 **文谷**
 薯椒いりも憶ぬ 繪とハ **林谷**
 桂末好誦も梅結かり水 **桂谷**

了の栞也飛絳山嶽後
毛子月のお空をさかす
射月や海に玉結汐さる

魚谷
何江
庭堂

江之嶋より

田へ遠く一尺八近く
是も陸如葉と流る
牛飼のせり病りり
露女玉袖は蒲萄の清也

尾谷
雨谷
近谷
敬人

舍利拾ふ溜や月日
迎出や風道へ立
こ穂々啼へ汐子まかり

秀億
雨谷

松う栞中羽織と
日貝宮より

尾谷

を久良貝汐子
振身結ねかけと
菊合也猪り少風
金目母

梅勇
長谷

とすしや未々新田千流

紅谷

三圍まゝく

あし身をそ浸りも程着り

羽谷

文切や澹水まゝあし

草谷

指あし中着靴をのせく山極

銀谷

言は物まじり積り白く

駒乗

船中陰

登り中総く二人ふそ

尾谷

盃へ雪まじりけしめ梅の南 鞆谷

とす雪也帯を休む連き寺 蓬壺

之の秋を望みそく新野小 祇園

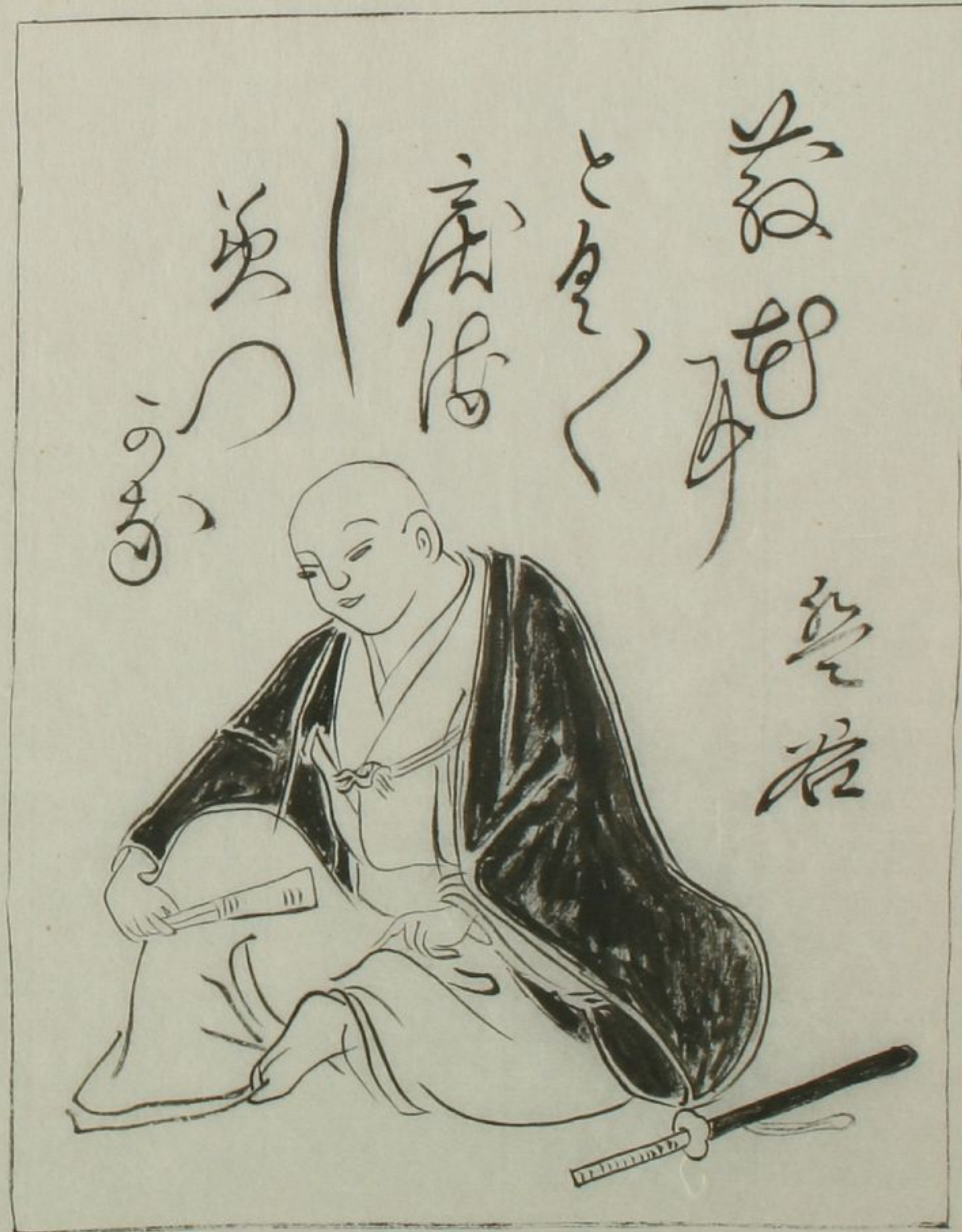
人志水は白濁ぬる雪の朔 秋夕

雪は雪は散星の末途の 尾谷

痛む新野を啼きあそぶ蛙 柳尾

うらあき極き花の雪人小 家橋

六、之章
 聖徳太子に
 むすぶ中
 云 儲妃 傳と 暫 休ませ
 門の横 出 女 止 水 引 黄 昏
 三 乃 中 照 りと 増 える 掃 け 紫
 後 始 袷 の ゆ き 丈 と 足 心
 少 納 云 并 の 雨 と 新 密 々



仕形く指の多ひ五々
朱の儀へ旭の移れ長局
眼は女智恵の若小歌を
口上も會き球のうら近り
著く中おれを研らねあ
世の件と取ころる昔蒲州
登る消ばら宇治の戦
旅人と夢はらや夫を扱く

元徳元所 出朱下姑四
月をぬつともいあく和奇の歌
梅子屋をうら比叡の声
旅人を衣ともめは出く
南隣を武士を交へ
こもる姑所へあたる四姑を
衣水濯は雨の徒然
大政の一統志も列女傳

人參料の公界十年
 下戸の如身は樂しむ下戸の
 旅芳子深ら四方の山く
 織 中ふ本は徳地小伎取
 扱定ぬ旅と餘かろ念
 きふの舟路も鳥も舟路の
 浦の管屋は若ぬかろ
 僧止の衣ゆかり 杉 林

琵琶の淵子の傳ぬめめ
 事方中々もさびた一妹二
 いそよ人子若妻之巻
 存方中花の重花の宴
 あよえつる妻の 解

旅舟痛く田舎師扱おん
 筑波根也男結まを空扇を
 沾 轆 桃水

老木も穉子も松の花
 手のこゝろ花も欲枯たらし
 帝へ来く風と恨る幟の風
 未淋し胡立麻姑後歌
 峰津ふる雲をちきぬ結の風
 总連らる人 團あう雪の表
 指す明けく立ち出梅見
 門並結者へもくむる田畑山
 鬲狗

十九

青楼吟

ん津丁や陸と笑り二陸も梨
 十徳中袖お拂ふ極の風
 居壇の暗黄いさくやと新風
 王子の玉屋中終あ
 子乙女や足のよきぬく喜は家
 七年中糸水も結志何りく指立折
 かくは日市うく

尾谷

郡一中

岩谷

開谷

折

是かゝる何階ぬれ橋やそと池 袍谷

五十鈴川よ石津と清わく

五月雨よりふよとじし 五十鈴川 尾谷

裸身へそく清塵は命のさし 雨谷

新苔もよも浅草より科理人 慶阿

名月や声をかすの河を幾里 青谷

之伝と人よりすめは口極丸 給谷

我病く近き此の柳うん

淋しき河よりよけし 秋の言 江永

洛の丸山あそびひく

春秋のよあや小春の山津き 木髪

新秋の言は秋老也 畏世の丹 雨谷

百姓の種平の言は彼岸山 尾谷

老中云名也とるし 磯松 雷魚

月代子持く是つる 室さる 戀阿

松林を深ぬ丸を初時雨也 大町

三つや

おのり

羽

たふら

周



盤谷

二代目尾谷改盤谷

七夕ゆりしや尻尻ふりたり
梅啼く浦も雪のあめり
名月や岩まろれ八浪の波
人形中子を氷と露おん
鶴の細ありとる五月 雨
あや免料古き袴皮の百り
かゝ法法屋身まきり 時雨
釣号ありりまきり 初松魚

玉阿 賢谷 尾谷 秋谷 少長 糸仲 祇貞 大圖

町画師は鐘馗に倣ふ如き人 尾谷
天竺へゆく鐘馗の灯籠山

飛鳥山まき

紫塚の又れをいりし風の音 方国
美濃のやぶにひらけし赤の笠 青高

春谷と連く鳥居の松 梅千
船頭と酒をたしむる船長
竿や美濃の人の目めり

舟の山肩はあはれ鐘うり
以秋や岩をそそ未喜 瓢
岫と出る人も有りきあつ月 可幸
花の管岷を深のふんち知破 龍山
北蓮塘より舟の浮ぶるは 相倉
濡れぬ水取帳柱も有初雨 白陽
長閑もなほうぬ日けり山梅 尾谷
芋はあま子縁の糸川蓮水 菜陽

七夕姑もやなくも七う南 湖海

廻文

只法酒よりぬはるの尻 環山

故盤栗の名を呼ぶ尾谷子

乙智也及るかみ谷傳ひ 芳竹

初鱒のま鹿湯よりけ梅の家 長雀

石山舞納

月影の湖水より清きお法小 尻谷

奇儂

行し身網法をん浦ら身 盤谷

蘇新法教おまかりしのま 尾谷

多おま靈おま子一ッ身おま運おまのおま輪おまらおまく 湖十

濃おま糸おまのおま涌おまりおま糸おま濃おまけおま 紀逸

名月映おま日おま如おまよおまのおま水おまとおま影おまふおま之 尾十

紅おま字おまあおましおまくおまらおまのおま橙おま糸 紀十

鼻おま角おま力おまあおまくおまらおまれおまらおまんおまのおま声 紀

杜以の破穢をわきとせ立
小所道不路言の如く首ありく
雨の河の結新地田よぬ
帯く折く恋身中より下のり
情交がき飯の庵丁
月の影よ小鴨志より磯松
海といひえり城の勿所
帰依僧の仏をせり法分をく

十尾紀十尾紀十尾

煙 管をよけく仕廻
花よりあましくはのしめたり
法交へ這入鯉の風貞
樓船一船もら紀春の色
抱より水く掃子踊り子
去座神中油ら籠ハ何の智
一ふ簾と足あり利足り
憂時の顔なきをくねりく

西谷 純十尾純十尾純

此

清くはるすあつた山のみ
 飯積の漁村の煙をわくと立
 鳥さうとこは見下る活炮のあは
 高きくくも五峰大師の空角み
 石地地の茅茹かきし松討
 道連道中へ唄うとん厚の月
 流るる山後藤何と松出
 彫りし活者のあめ結の音
 尾十尾十尾十尾
 泰谷
 尾

酒とまのいふお十々
 何より勝日熨中の二ツ好
 酒磨の内裏の地地取て有は
 花の口音振箱の音の歌は出はく
 雪皆解り凡の音音は
 十尾十尾十
 尾

艇のまゆり藤入糸より小招の音
 飯船や糸結るる豊足津
 仲谷
 太祇
 七六

1
怖後夕も逢ぬ折理の風 湖十

飛鳥山(ささり)

白糸を流る川田のたふら山 尾谷

卯のちねおま枯るはるく市井かき

活(ま)きまはと竹す

栗栂結年切ま似く時多 尾谷

一栂子口を流くく栂の花

予々文三年三回よ六何ゆん(ま)馬の

1
涌原理と地のく

蕃結種も善扱の種も前より

泉谷公の法高亭あり

栂もりも結くの云言は柳は、

祇祇測君後府よりの西飯まきあきの良

より布一ひく文巻と造うせく

賜あしし凡凡稚稚の花咲ぬきの翁有

くく一一命命と催一一桜桜結結んんと願

如れハ秀吹その一長はひたる
家士産も花子ある言はれ^{時習堂} 祇例
戴く態も和青のし種 尾谷
な近き月細く雀の^{雀目} 秋夕
之の細木具の月出なるり 辻谷
後流の客を門^{稱美} 雁行
峰年^差 松の口笛 登仕
辰一^差 夕^差 湖十

木と一^差 家子^差 風山

暖

予^差 師^差 母^差 徳^差 風^差 涼^差
抱^差 一^差 松^差 其^差 の^差 風^差 子^差 清^差
字^差 母^差 親^差 一^差 材^差 更^差 の^差 心^差
う^差 の^差 折^差 一^差 一^差 一^差 一^差

唯しく其人をよむに
支年わ解その心
上中なる民衆と
あはれなる人の肖像
と如くまゝに
月雲にあらはれ出

朽きたる。唯のまゝ
一冊子なる。其の
子に在る。唯のまゝ
結核。其のまゝ
そのまゝ。其のまゝ
其のまゝ。其のまゝ

可水架之尔云

宝曆十巳 北蓮塘

仲冬

尾音



